

変転する時代の 生命倫理と宗教

—宗教は新たな生命のかたちとどう向きあうか—

① 10:25 ~ 10:30

挨拶

川中 仁

上智大学神学部教授/上智大学キリスト教文化研究所所長

② 10:30 ~ 11:30

仏教による生命の定義から 新たな生命のかたちを考える

師 茂樹 早稲田大学文学学術院教授

③ 13:00 ~ 14:00

アニミズム再論

—不平等な時代の〈生命〉の平等—

奥野 克巳 立教大学異文化コミュニケーション学部教授

④ 14:15 ~ 15:15

教皇庁生命アカデミーの取り組み

—グローバル・バイオエシックスの構築に向けて—

秋葉 悦子 富山大学名誉教授、教皇庁生命アカデミー正会員

⑤ 15:45 ~ 16:45

シンポジウム

モデレーター 竹内 修一 上智大学神学部教授/上智大学キリスト教文化研究所所員



上智大学中央図書館8階
L-821会議室

【開催方法】会場（定員50名）+ Zoom ウェビナーによる配信

【参加方法】事前申し込み制 受付期間 5/1(木) ~ 5/31(土)

下記 URL または QR コードよりお申し込みください ※電話での申込受付不可
<https://forms.office.com/r/ZR0eNYkF2F>

【聴講料】一般 1,000 円 学生 800 円 ※銀行振込 / 詳細は受付後に別途案内

最新情報は研究所HPにてお知らせいたします



変転する時代の生命倫理と宗教

— 宗教は新たな生命のかたちとどう向きあうか —

講演会 趣旨

わたしたちの常識において、常に侵すべからざるものとしてあり、あらゆる倫理の中核に置かれる〈生命〉は、しかしその定義・概念・位置づけにおいて、もっとも変容・変質を遂げてきた歴史がある。前近代において、神話や宗教によって説明されてきたその起源・存在は、やがて近代科学による追究、進化論、遺伝学などの言及、医療技術の発展を受け、神の領域から半ば引き離されて、人為的に改変可能なものとなっていった。とくに産業革命以降、文明の発展の名のもとに動植物の〈生命〉は大規模に奪われ、20世紀には、優生思想や社会ダーウィニズムの展開のなかで、〈生命〉の価値に優劣を付けることが公然と行われた。わたしたちはいまその反省のうえに立っているが、しかし暴力の応酬は止まるところを知らず、あらゆる〈生命〉は常にその存在を脅かされている。卑近な表現ながら、わたしたちは〈生命〉を守るために何ができるか、あらためて考えてゆかなければならない。

とくに現代では、その〈生命〉の捉え方が、いままで以上に動揺しており対応が難しい。再生医療で試みられる身体部位の培養、クローンの創出、食用肉の合成など、どこまでを生命と認めどこからを生命と認めないのか、議論が絶えない。一般的な生物/無生物の境界も動揺しているが、そもそも古代社会や民族社会にみられるアニミズムでは、動植物はもちろん、いまのわたしたちがひとつの生命とはみなさない岩石や土壌、水、雨や風などの自然事象のほか、家や船、生活用具など、人工物にも神霊を認めている。列島社会ではかかる傾向が強いとよくいわれるが、例えば、1990年代にブームとなった「たまごっち」の葬儀をはじめ、ゲーム・キャラクターに生命を認める文化は、現代のヴァーチャル・アイドルへの熱狂にまで結びついている。とすれば、近年話題のAIに人格を認めることなど、文化的・歴史的多元性においては当たり前のことであり、むしろ、これを否定する感覚のほうが特別なかもしれない。

変転する時代のなかで、いま、〈生命〉をどう捉えるか。〈生命〉に対しどう向きあうか。仏教、キリスト教、文化人類学の専門家の話を聞き、その多様性のなかから、未来をまなざす指針について考えたい。